農村社会は存続できるか
——後継者問題からの一考察——

駐村研究員　星　　寛　治（山形県高畠町）

1．枯渇する農業労働力
2．世代交替の切れ目に予見されること
3．農地の管理をどうする
4．開発に資本の触手
5．もう1つの農業の道
6．有機農業にも壁
7．国の政策が変わらなければ

1．枯渇する農業労働力

私が農業に就いて，34年が経った。その間，時代の変遷や，近代化をめざした施策や，農民自身の取り組みによって，農村は目を見張るように変わった。それは，農村革命という言葉が誇張ではなく，的を得た表現だと誰しもうなずくほどの激しい変わりようだったと思える。かならずしも成果だけではなく，矛盾の深化という意味でも，この30年の歳月は，歴史の中にぬきさしがたい位置を占めるだろう。

しかし，その変化の軌跡をたどることが本稿の主旨ではない。すでに変わってしまった現在を基点として，また急激に変容していくであろう近未来をどうとらえ，何を創出していけるのかを，村の現場の中で考えてみたい，と思うのである。

私自身も含めて，いま，日本の農村において最も切実な問題は，すぐれた労働力をいかに確保するかということである。言いかえれば，担い手たる後継者をどうするか，という最も基本的な課題の前で，立往生しているのである。基盤整備や施設設備の近代化，作業の機械化を推進し，いわゆる入れ物づくりが出来たとしても，それを十分に活かして生産力を高める人材が居なければ，投資は空振りに終わることになりかねない。

すでに実態として，農業生産の主要な担い手は，50代，60代の中高年齢層と，婦人に移っている。春と秋の農繁期のピーク時を除けば，田畑に若者の姿を見ることはむずかしい。農山村には，高齢化社会が一足先に訪れているのである。

それを裏付けるように，この春の新規就農者は，全国で2,200人と発表された。たしか3,245の市町村自治体があるはずだから，一市町村当たり，0.7人位しか残らない訳である。ちなみに，私の高畠町の場合，去年はゼロ，今年は一人だけ，新たに農業に就いた。山形県下では，今年約90人の若者が就農したというが，44の市町村があるから，平均2名ほどである。地域による偏りも考えられる。山形県の農家構成をみると，平均耕地面積が1.1ha，88,300戸の内，専業農家が7,350戸(8.3%)，第一種兼業25,650戸(29.1%)，第二種兼業が55,300戸（62.6%）となっており，農業県での様変わりが伺える。高畠町においては，昭和60年のセンサスで農家一戸当たり耕地面積が1.4ha，2,884戸の内，専業農家が289戸（10%），第一種兼業1,125戸(39%)，第二種兼業1,470戸（51%）となっており，県平均よりも専業と第一種兼の比重が高い。にもかかわらず後継者の確保については，むしろきびしい状況にある。その背景には，NEC，岡村家具，小森印刷などの大手の誘致企業が町内に

立地し，さらに隣の米沢市の工業団地などにも企業の進出が相次ぎ，近くに通勤可能な職場ができ，若い労働力を吸引している事情がある。たしかに出稼ぎは減少したけれど，その代わり農家の子弟のほとんどが勤めに出る型が一般化したのである。

そういう私の町で，同じ昭和60年の国勢調査によれば，適齢期の未婚男女の内訳は次のようになる。20～40代は男1,577人，女890人，30～34歳は男271人，女75人，35～39歳は男160人，女27人，40歳代は男72人，女24人であった。人口28,000人の町で30歳を過ぎても独身の男女が総数629名に及び，しかも男503人，女126人というひどくアンバランスな内容が気にかかる。この実数を見ただけで，空前の配偶者難，というより嫁ききんの状況にあることがわかる。もちろん，この数字は農家の子弟だけに限らず，町内の未婚者の総数であるが，地域農村社会が，いかに大変な所に追い込まれているか，その指標を通して読みとれる。

2．世代交替の切れ目に予見されること

前述したような50代後半から60代の多くの担い手たちは，あと数年もすれば百姓定年を迎える。気持ちだけは若くとも，身体の方が思うにまかせず，きつい労働や，大型農機具の操作などが困難になるからである。つまり世代交替の段階を迎えることは避けられない。そのときに，すでに30代の半ばに達した息子は，勤めている職場の中で中堅として働き，その給料の家計における比重も高まっている。さて，親たちが働けなくなって，農業経営をどうするかという場面にぶつかったとき，どういう選択をするものであろうか。たとえ，先祖伝来の土地を荒らしたり，放棄したりしてはいけないと思っても，2 ha 前後位の農地を譲られても，農業だけで食べていけるか，という現実的な壁にぶつかってしまう。

そうした岐路に立って，家族相談をくり返したとしても，結論は十中八，九は農業を縮小するか，放棄しても，今の勤めを主体にして生活設計を立てる以外にない，ということになるように思われる。これは，私の主観的な見方というよりは，間もなくそういう選択を迫られるであろう親たちに，直接伺った答えの多くはそうなのである。言い換えれば，いま50代，60代の親たちは，殆ど「百姓は俺たちの代で終りだナ」と，ひそかに観念している風なのである。

物心ついてこの方，農業一筋に打ち込んできた人たちでさえそうなのだから，ましてや土に親しむことの少ない若い世代は，いともあっさりと農を捨ててためらわない。長男長女の跡取の場合は，家を継いで，家系を守っていかなければならない，という潜在意識はあるが，それと農業を継ぐということは，必ずしも重ならないのである。

今日，日本の農業を取り巻く内外の状況は，農業が好きで，それにかけてみようと志す若者の心をもためらわせるほどきびしい。他産業との所得格差が年々開いていく現状では，きわめて現実的な物差しで測れば，将来展望を見出すことはむずかしい。沢山の情報を持ち，かしこく計算高い若者たちが，困難を覚悟で農の未来性に賭けるという確率は，極度に少なくなってきている。

もう一つ見逃すことができないのは，人々の生活感覚の変化である。一度土ばなれをし，きれいな職場で仕事に馴れた人間が，ふたたび泥にまみれて農作業に打ち込むことは，大変な抵抗感を伴う。よほどしっかりした価値観を持たないと，帰農という流れを自ら汲むことは至難のわざといわねばなるまい。汚れ仕事から足を抜き，限りなく土から遠ざかることが，文化的な生き方に接近することだ，と錯覚した現代人にとって，離農はむしろ出世だとする意識がある。今日，経済大国日本の大人たちがつくり出した教育，文化の環境

は，まさにそうした倒錯をあたりまえのものにしてしまった。悲しむべき世相と言わなければならない。

3．農地の管理をどうする

このままのすう勢でいくなら，10年といわず，あと5，6年位で地すべり的な変動が，わが国の農村社会を見舞うのではなかろうか。それは，前述したように若い労働力，すぐれた人材を確保できない現状からすでに始まっていると見なければならない。

その段階で，いま辛うじて管理が施されている農地の荒廃が，急激に進むことになりかねない。相対的に生産基盤がぜい弱な山村地帯から，中山間地帯へ，さらには平野部へと雪崩れのように村社会の崩壊が始まると考えられる。機械化や近代化は，おそらくその流れをせき止める堤防にはなり得ない。それどころか，かえってそれを促進する要素にすらなるであろう。

しかし，そうした崩壊現象を，地域住民はただ手をこまねいて見ているわけではない。個別の経営努力によっても，どうしても及ばない所は，受委託や集落営農などによって，活路を開こうという試みなどが各地で行なわれている。行政や農協などの指導機関は，とくに集落営農の方向に政策誘導しようという動きが目立つが，それにしても，主体者である農民の側に意欲的な姿勢と，すぐれたリーダーの存在が不可欠である。ただ，少数の中核農家に過大な期待と，過重負担をかけるだけでは打開できるとは思われない。水管理や生産，生活環境の維持ということになると，むら共同体のまとまった力が必要なのである。

だから，それまで公民館活動や，地域の伝統行事や文化を継承する精神的な日常活動の積み上げによる住民のまとまり，連帯感が土台として形成されていなければならない。会社や職場の人間関係が先行する風潮にあっては，集落営農集団を形成し，事業を推進する基礎的な部分がぜい弱で，青写真が現実味を伴なわない場面も起こり得る。集落営農が，農村崩壊をせき止める決定打になり得るかどうかは，一つにかかって住民の主体的な力量と，それを育成助長する公的機関や農協などの熱意と指導力に負う所が大きい。

4．開発に資本の触手

近年，手づまりの地域振興を打開する手段として，ゴルフ場やリゾート開発に期待する動きが盛んである。雪国東北の村々もその例外ではない。私の隣町では，すでに3つのゴルフ場が稼動し，さらにもう1つの造成が計画されている。ゆたかな自然に恵まれ，肥沃な水田地帯の水源地を形成していたなだらかな丘陵地帯が次々と裸にされ，風景を変えていく姿は，農にこだわる人間にとっては痛痕の限りである。最近明らかになった大量の農薬散布による水資源や地域環境の汚染の問題は，1つの農村破壊の様相を帯びている。

もちろんそれ以前に，広大な山林原野や農地が，資本によって買占められ，農民は小土地所有者でなくなる訳である。つまり，現代版土地囲い込みが，ずい所に，大規模に展開し，その利権をめぐって人とカネが動くことになる。場合によっては行政が，その誘致と推進に一役買うこともある。

スキー場やリゾート開発にしても，同様な構造のもとに進められ，地域開発の救世主のように迎えられるふしもあるけれど，少なくともそれは農業，農村の振興発展とは重ならない。むしろ，村を身売りして，第3次産業のかさの下で生きのびようとする選択なのである。ただ，それでもいい，という住民の合意が形成された場合は別であろうが，90年代，環境問題が最大のテーマになろうとするときに，せっかくの美しい地域の宝を壊してしまうのは，あまりにもったないと思えて仕方が

ない。

5．もう1つの農業の道

私たちが，昭和40年代の終わり頃からすでに十数年，地べたを這うようにして実践してきた有機農業は，ようやく市民権を得て地域に根づきつつある。全国的にも1種のブームの様相を示し，各地で夫々の個性的な取り組みが行なわれるようになった。行政や農協の施策の視野にも入るようになり，組織的な取り組みさえ行なわれている。

私の町でも，若い農民集団の先駆的な実践と成果が見えてくるにしたがって，地域に波及し，今では約300戸ほどの農家が有機農業に手を染めている。必ずしも全面的な展開までに至らなくとも，近代農法とはちがうもう1つの農業の道に目覚め，取り組み始めたことの意味は大きい。

初め，その動機となったのは，農民自身の健康と安全の問題であり，同時に地力収奪農法の限界を知って，地力維持型の永続的な生産体系への転換であり，さらには生活と生産の自給向上を通して農家生活を守り，充実させようということであった。それは，他からの働きかけというよりは，農民自身の内発的な生活防衛の営みであった。

しかし，世をあげて近代化を求める潮流の中で，少数の自覚的集団の原点復帰の運動は，まさに艱難辛苦にみちていた。筋道の正しさは信じていても，技術的には全く手さぐりで，モデルなしの実践の連続であった。あるいは，地域社会の中では，一種の精神的村八分の場面さえあったことを思い出す。

ただ，そうした苦境の中にあって，都市の中から支援の手がさし伸べられて来たことは，孤立していた私たちにとって，何よりありがたい大きな励ましであった。それは，良心的な学者であったり，マスコミであったり，そして目覚めた消費者，市民の人たちであったりした。共通しているのは，すでにあの時代，物質文明の矛盾に気付き，それを止揚すべく思いをめぐらし，自らの持ち場で発言し，行動を起こしている人々であった。

地域社会の中で私たちが内発的に取り組み始めた動きと，都市の先駆的動きが出会うことによって，産消提携の新しい運動が発生していくわけである。それもまた，試行錯誤の運動ではあったが，双方のえい知と，わざと，力を結集して，序々にたしかな流れを形成するに至ったのである。「顔の見える関係」を合い言葉に，それまで分断されていた生産者と消費者の人間関係を回復させたことの意味は大きい。それは，少数者の直接交流から出発しながら，10年を経て，既存の市場流通の質を変えていく衝撃力を持つに至った。今日，至る所に出てきた自然食の店や，有機農産物の標示は，実態を超えた過剰宣伝を伴い，たくましい商魂の津波によって，本物が押し流される兆候さえ伺える。しかし，裏返せば，食べ物の安全志向の国民的な高まりを示すものとして，まさに隔世の感がある。

6．有機農業にも壁

中核的な存在としての有機農業研究会の周辺に，幾つかの生産集団が誕生し，活動を続けているが，私の住む高畠町和田地区に3年前発足した上和田有機米生産組合は，地域運動としての形態をつくりつつ，注目すべき展開を見せている。会員も130戸を数え，そのうち6割位は20代，30代の後継者を有している。冬期間だけ，地場産業などで働く人が多いが，構成員は専業，第一種兼業が殆どで，これからも農業を主体に生きて行こうとする姿勢を示している。他の地域では，担い手の高齢化が顕在化しているのに比べ，若手，中堅の農民が主体になって，ダイナミックに地域農業を活性化しようとしている所に，特筆すべき点がある。時代のすう勢からすれば，ややハ

ンディを背負う中山間地帯にあって，もう一つの農業の道に希望を見出した若者たちが，これから困難をのり切ってどれだけ経営の充実に立向かえるかどうか，正念場を迎えているといえよう。

ただ，生産組合の構成員全部に後継者がいるわけではない。年と共に高齢化していく農家では，これからどこまで続くかという不安がつきまとう。それは，十数年来，新しい生活の質を求めて活動を持続してきた有機農研の場合でも，事情は同じだと言える。つまり，労力問題の壁にぶつかれば，有機農業といえども限界があり，じりじりと縮小，撤退を余儀なくされるのである。むしろ，機械や薬剤に依存せず，必要な所には十分に人手をかけることが有機農業の身上なので，かえって労働力の枯渇は決定的な影響力を持つであろう。有機農業が，現代社会の最大のテーマである環境保全の役割も含めて，筋道の正しさや未来性を十分抱えつつも，それとは別の現実的な壁にぶつかって立往生する構図が浮かんでくる。

それを打開する力は，地域農村社会の内部だけでは生まれない。久しくつづいた農村から都市へという人口の流出と，地域の中における農業から他産業への労働力の吸引によって，潜在的な労力の泉はほとんど枯渇したといっていい。だとすれば，反対に都市から農村へという人間の移動の新しい潮流が生まれない限り，打開メドは立たないことになろう。実際にそういう流れをつくり出すことができるかどうかに，農村社会存続のカギがあると思う。

7．国の政策が変わらなければ

私たちが創出してきた消費者や都市住民との交流の延長の所で，空前の飢饉にあえぐ後継者の育成，とりわけ配偶者の確保ができるかどうか，非常に難しい課題ではある。数年前に，大卒の知識青年や脱サラの若者たちが過密の度を加える都市社会と，管理社会からの脱出を志し，農山村に移住する事例が目立った時代があった。私の地域でも，10数名の都市青年を迎え入れ，期待をこめて地域に根を張る条件を整えるべく力を注いだことがあった。農業については，全く初心者であった彼らが，その後たくましく成長し，開かれたむらを創るために少なからぬインパクトを持ちつつある。しかし，その後，そうした流れは弱まり，脱都会の若者を迎える機会は少なくなった。いまの若い世代の価値観が，さらに様変わりしたのでは，と寂しさをかみしめるこの頃であった。

ところが昨年，現役の大学ゼミの学生が，次々と夏休みのフィールドワークに来訪したのである。千葉大，立教大，早大，東京農大などの学生が，十数名から二十数名位のチームを組んで，５日から１週間，長い場合は半月間も滞在し，合宿や民泊をしながら農業体験をして帰ったのである。その間，調査や交流を通して，農村の実態を把握し，とりわけ有機農業をトータルな視野でとらえようと努力する真摯で，ナイーブな姿がきわめて印象的であった。学生の多くは，法律，経済，文学，教育などの文系に所属する人が多く，とくに「生命と環境」の問題をゼミで深く学び，食べ物生産の現場である農業に関心を寄せてきたのである。女子学生の姿も目立ち，暑いさ中での農作業に汗を流した。

それは，これまでになかった新しい萌芽であり，直ぐに農村に住むという動きには結びつかないけれど，これからの社会の中で一定の役割を果たしてくれるのではなかろうか。歴史的な地殻変動を伴いつつ，20世紀はまもなく終わり，新世紀のあらたな文明が創出されようとしている。その主役となるのが，そうした自覚的で，行動的な若者だと信じている。

しかし，基本的には，国の施策が思い切っ

て転換されなければ，そうした新しい芽を育てていくことはむずかしい。これまでの経済効率重視の路線から，生存基盤確保の基本的な役割と，環境保全機能の重要性を視野に治めた生命重視の路線へと，大きく転換することが求められる。すでにEC諸国の新政策には，環境調和型の思潮が明確に出ており，西ドイツなどの粗放型農業導入の具体策などに大いに学ぶ必要があろう。さらに，山村など水源涵養地帯や，河川流域地帯における化学物質投入の規制など，緑の政策の進展が見られる。地勢的に効率の低い地帯，つまりハンデキャップ地域に対する国家財源の投入による保護の強化などは，実に示唆に富んでいる。

先日，私は，ある知人からスイスの農村の写真をいただいた。花に飾られた実に美しい農家のたたずまいであった。氏によれば，それは特別の農家の風景ではなく，どこの村に行っても農地は活かされ，生活環境は整えられ，生き生きした雰囲気がみなぎっているという。「国策がしっかりしていることの表現であると思われる」というコメントが添えてられあった。

むらルネサンスの運動を通して，私たちが描くのは，この地域にふさわしい固有のむらづくりである。世代間交流，地域間交流のるつぼになるような拠点施設を創り出し，周囲にゆたかな自然環境や，農場や，果樹園や，手づくり工房などを配し，体験やわざの伝授や，相互啓発の場と機会を日常的に準備し，自然と一体化できる学習空間，生活空間を描いている。いわば，生涯学習むら，文化むらのイメージなのである。そうした魅力ある受け皿をつくることによって，都市から農村へという流れを，より大きく，たしかなものにしていきたいと願っている。

新しい桃源郷づくりに向けての着想は，ようやくいま始まったばかりであるが，地域住民の主体的な力量を傾注し，都市々民の熱い支援の輪を拡げ，さらには，行政や指導機関の政策的展開と呼応しつつ，その夢を実現したいものである。